

Ⅱ. 小学部

学部研究テーマ 「子どもからの学びを活かしたコミュニケーション支援

～五感で受けとめたい、伝えたい～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 研究テーマ設定に向けて

研究テーマを設定するにあたり、本校研究テーマ「一人一人の『わかる』を大切にしたい学習活動をめざして」の中の「わかる」に迫るため、まず小学部の子どもについて、全人的な見方で、それぞれのもつ得意なところや伸びが見られるところ、また、弱いところや課題となるところなどを、学校生活全般に渡って挙げることにした。その中で見えてきた基本的な生活習慣面や学習面、運動面、行動面などあらゆる面での様子の基盤的な要素は、子どもと教師との「わかり合い」にあるのではないかと共通確認できた。そこで、小学部ではこのことを踏まえて、「わかる」ということを生きていく大切な基盤でもあるコミュニケーションという分野に絞って試みていくことにした。

小学部の子どもと教師とのかかわり合いを振り返ってみると、良好なものは多々あるが、一方ではうまくいかないものも少なくない。その要因としては、例えば、子どもが自分の思いを伝えているにもかかわらず、教師は伝えられたことに気づかないこと、伝えることができる状況無くしてしまっていること、教師が子どもの思いを受けとめるにあたり、その思いの一部しか受けとめることができないこと、違った解釈をしてしまっていることなどが考えられる。近年の本校小学部の子どもの様子をみると、ことばだけでコミュニケーションをとることがより難しくなっている。いろいろな事例を話し合う中で、どのようにすればコミュニケーションが円滑になり、より一層広がるのか、深まるのか、そして「わかり合う」ことができるのかということを追求する必要性を感じた。更に保護者のニーズとして、簡単な会話ができるようになりたい、互いの意思疎通がうまくいくようにしたい、などコミュニケーションについての要望が少なくない。これらにも応えたいと考え、本研究テーマを設定した。

(2) 「わかる」についての考察

コミュニケーションを考える上で、「わかり合う」ためにどのようなことが大切であるかを話し合い、以下のような視点をもった。

① 教師が子どもを「わかる」ために

【子どもを知る】

子どもの行動や表情、視線、しぐさ、指さし、サインなどを受けとめるとき、たとえばそれが弱いもの、わかりづらいものであっても、いかに教師が多くキャッチし、その場の状況に応じて、正しく見極めるかという力量が問われるであろう。また、その子の障害の特徴も十分理解していかななくてはならない。そして、子どもがどのようにわかったのか、また、なぜわからないのか（わかったからできる、わかったからあえてしない、わからな

いからできないなど) という原因を、教師の経験的な目を見て判断することも大切であるが、やはり客観的に分析し、探ることも大切である。その分析により、子どものわかり方(ものごとを学習するにあたり、視覚的・聴覚的なことを手がかりとしたり、全体や一部分としてものごとを捉えたりと、その子その子によって異なり、特徴があるということ)がわかる。

【教師自身を知る】

教師が子どもを知るためには、自分自身の考え方の傾向を知ることが大切である。これが一番困難なことであると思われる。子どもの行動やその時の気持ちを解釈するにあたり、偏った見方や自分本位な見方にならないよう、自分自身の考え方から一歩引いた見方で見たり、他者から客観視されたりすることで、これまでに気づかなかったことを発見できると考える。

②子どもが「わかる」ために

【情緒の安定、経験の積み重ね】

情緒の安定を土台として、いろいろなことを経験する中で、そのことが子どもの記憶として残っていく。このようなことを繰り返し積み重ねていくことで、ものごとが身につけていくようになる。

【知的好奇心、状況把握】

新しいことに会うことで、また、多くの経験の中から何だろう、やってみたい、おもしろいな、などという知的好奇心が生まれ、知りたい、わかりたいという意識が芽生えてくる。やはり、好きなこと・興味のあることから取り組みをスタートしていくことが「わかる」ことへの近道となりうるのではないだろうか。好きなことに向かう時、子どもの目は集中してものごとに見入り、笑顔で取り組んでいる。それが思考することの基礎となり、状況や見通しをもつことができるようになる。

【人への意識、興味・関心】

人を意識するようになると、自分の思いを知ってほしい、相手を知りたい、お互いにわかり合いたい、理解したいという気持ちも生まれてくる。

(3) コミュニケーション支援について

ここで取り上げるコミュニケーションは、子ども対教師に絞って考えてみた。まずは、互いに対等な関係であることが大切であり、どちらかがどちらかに支配される関係であれば、本当のコミュニケーションは成立しないのではないだろうか。

今、改めて振り返ってみると、コミュニケーションがスムーズにいかない場面では、教師側の立場で考えてみると、なぜ子どもはわからないのだろう、わかってくれないのだろう、というように否定的で教師主導の見方であったように思う。研究テーマにある「子どもからの学びを活かした」というように、子どもから出発し、子どもと教師にとって互いに理解し合うことができる手立てを、試行錯誤しながら用いて支援していくことに目を向けていかなければならないと考えた。うまくいった取り組みはもちろんのこと、うまくいかなかった取り組みについても今後活かしていく上で大切なものと捉えていきたい。

また、「五感で受けとめたい、伝えたい」というサブタイトルには、文字や写真カード、サインなどのいろいろな伝達手段を有効に活用すると共に、音声言語だけでなく、相手の表情やしぐさなどを見落とさないよう、五感すべてを総動員させてかかわっていきたいという思いが込められている。教師は子どもが今何を伝えようとしているのか、という子どもの思いを敏感に感じ取り、受けとめ、そして、「わかったよ」ということを伝え、更に子どもに「わかる」（理解できる）ように伝えていきたいと考えている。

（寺 倉 万 喜）

2. 研究の方法

学部研究を進めるにあたって「わかる」という視点から、授業研究や事例研究などを中心に据えて以下のような手順で研究に取り組んだ。

（1）授業研究

「朝の会」を取り上げ、目標を再確認し、教師の指導方法や支援の仕方、教材・教具の工夫や選定などを行う。

（2）校内の環境整備

教室の表示や掲示物などが子どもたちにとってわかりやすいものなのか、また、必要であるのかを検討し整備を行う。

その子その子に適した活動の手がかりとなるような支援ツール（見てわかるものなど）を考え、作成する。

（3）コミュニケーション支援の事例研究

①子どもの全体像を把握する

- ・子どもの全体像について話し合う
- ・一人一人の子どものかかえる課題について話し合う
- ・コミュニケーションの取り方の特徴を捉える
- ・保護者の願いを聞き、課題を確認する

②子どもの中心的課題を明らかにする

③「わかる」という視点で実践を行う

④実践の評価をする

- ・学習環境やコミュニケーション支援の方法、子どもの変容について話し合い、共通理解する

⑤評価した結果をもとに方向性を導き、再度実践する

- ・子どもから学んだことを整理し、ハード面の整備や支援の最適化を図る